

## Information

2010年に設立60周年記念行事を！

ミシガン大学日本研究センター岡山分室



終戦直後の1947年、アメリカはミシガン大学に「日本研究センター」を開設します。国家戦略として、明治以降急速に近代化を進めた日本の社会構造を、政治、経済、文化、地理、習俗などあらゆる角度から研究することが目的で、1950年4月には岡山市南方に「岡山分室」が設けられました。

その岡山分室が、2010年に開設60周年を迎えるのを前に、当財団の「平成20年度文化活動助成」を受けた岡山理科大学地域分析研究会が、岡山分室が果たした歴史的役割に再評価を加える研究を進めています。同センターの調査が、皮肉にも日本を記録する唯一の資料となっているからです。

ミシガン大学日本研究センターの調査には、当財団の初代理事長・故谷口澄夫氏が受け入れ側の第一人者として協力しており、昨年暮れに開催された第2回の研究会では谷口氏の長女・弥生氏から当時の研究者の調査方法などの報告もあり、研究を深めました。

地域分析研究会では、桜美林大学の中生勝美教授から、日本研究センターが戦後間もない岡山を撮影したフィルムや調査資料などの寄託を受けて研究資料を充実させており、徳澤啓一代表は「岡山分室設立60周年には、実のある記念行事を実施する努力をしていきたい」と希望を語っていました。次回研究会は2月28日（土）岡山理科大学で開催される予定で、参加者を募っています。

パンフレットができました

パンフレットでは、福武教育文化振興財団の概要、目的、事業について紹介をしています。広報活動に活用し、より県民の皆様身近な財団であることをアピールしたいと考えています。



瀬戸内海を考える国際シンポジウムを開催いたします

## 瀬戸内海「未来から見た風景」（仮題）

『瀬戸内海「未来から見た風景」（仮題）』を下記のとおり開催いたします。

今回のシンポジウムは、現代アートを取り入れることで新しい地域づくりをめざす瀬戸内海と、埋没した歴史の中から未来を探ろうとする地中海に焦点を当て、未来を予測するのではなく、未来からのまなざしに応える姿を語ろうと試みるものです。多数のご参加をお待ちしております。

開催日時	2009年3月14日（土） 13:30～17:00
会場	山陽新聞本社さん太ホール
定員	300名 *入場無料
主催	山陽新聞社、RSK山陽放送 財団法人 福武教育文化振興財団



F U E K I

不易

vol.33

[特集2] [特集1]

発報

瀬戸内の島々交流協議会

海外教育事情調査団  
オーストラリアの職業教育 PART2

足告

★岡山県立岡山盲学校を訪問して★2010年に設立60周年記念行事を！★パンフレットができました★瀬戸内海を考える国際シンポジウム開催

## 岡山県立岡山盲学校を訪問して

今回は岡山県内の視覚障害に関する総合支援センターが設置されている岡山県立岡山盲学校を訪問した。岡山市原尾島の南、操山の懐に抱かれて学校はあった。

外部から訪問すると校門に入る前から「キンコン」と澄んだチャイム音を聞くことができる。これは在校生、職員が登校する時や校外に出かけた時の学校の所在を知らせるためだそう。また、岡山駅から学校まで走るスクールバスもあるが、百間川橋西詰めバス停から盲学校の玄関までは岡山中で発明された世界初の点字ブロックが敷いてある。校内の渡り廊下にも点字ブロックが敷いてあり歩行を助けている。



訪問のきっかけは「障害児の自立を応援」と題する新聞記事からであった。記事によると明治41年11月25日に私立岡山県教育会附

属盲啞院として現在の番町一丁目に設立され、今年で100周年となる。この学院こそが岡山県で最初の障害児・者のための教育が行われた学校である。学院名からわかるように実は盲学校と聾学校の2つの学校のルーツは同じで、昭和12年5月22日にはヘレン・ケラー女史が来校されており両校の誇りとなっている。昭和23年に、盲学校、聾学校は義務化に伴い分離され、昭和27年に盲学校は現在地の原尾島に移転し、聾学校は昭和47年4月1日に岡山市土田に移転して現在に至っている。改名・移転・移管・分離など数奇な歴史をたどっている盲学校を今回は紹介したい。

さて、その岡山盲学校は県内唯一の視覚障害者対象の学校で、小学部、中学部、高等部(本科・専攻科)の課程があり、現在49名が在籍している。視力の状況は全く目が見えない人しか在籍していないと思われがちだが、現在の児童生徒の実態は、弱視の方が約70%、全盲の方は約30%。年齢層も6歳から中・高年までと幅広い。特に中高年の実態としてある日突然、カメラのシャッターが下りるように、視覚を失われた社会人の方も、高等部に入学され職業教育を受けている。

## 特別支援教育にかけた100年の情熱

## 障害生徒の自立と社会参加を目指して

その学習内容の一端を紹介しよう。小学部入学と同時に点字の読み書き学習が始まり、点字タイプライターの操作が必須条件となる。同時に白杖を使った歩行訓練やレンズ訓練などの自立活動も中学校卒業まで継続して行われる。学校生活の場では給食や掃除も、健常児と同じように行っているのにびっくりさせられる。また、野球(グランドソフトボール)や卓球(サウンドテーブルテニス)やバレー(フロアバレーボール)等の部活動もある。校外学習や社会見学、修学旅行等も同じように実施している。



点字タイプライター

取材で訪問させていただいた日、小学部の児童が繊細な指にもかかわらず凄く速く点字タイプライターを操作し、学習した感想を点字でプリントしていたのには感心させられた。読んだり書いたりする媒体が異なるだけで通常の小・中学校とほとんど同じ内容で学習している。さらに将来の自立へ向け、高等部普通科より大学進学を目指す者、また理療科であんま師、専攻科であんま師・はり師・きゅう師の国家資格取得を目指す方など、児童生徒が真剣に自分自身の将来を

見つめて懸命に努力している姿には感動させられた。自立し社会参加することは厳しいことだと思うが、きっと彼らならやり遂げることを確信した。彼らに幸多い人生が待っていることを祈りつつ校門(揮毫は故三木行治知事の筆による)を後にした。

(財団・赤松)



点字の地球儀

## Cover Photograph

嘗て、岡山・京橋から瀬戸内海へ向けた航路が開かれ、犬島、小豆島への定期便が通った時期もあった。当時旭川に沿った京橋界隈は、江戸時代からの賑わいを留めていたという。

今、港の跡形もなく賑わもないが、宇喜多秀家が作ったという町並みには往年の風情が感じられる。

この京橋を起点とする瀬戸内海への航路を再開し、瀬戸内の島々との交流を強めようという市民運動が始まった。名称を「瀬戸内の島々交流協議会」。略して「島会」と呼び、昨年11月22日に発足、記念シンポジウムが開かれた。

この特集では市民運動の一員で、シンポジウムにも参加したグラフィックデザイナー田中雄一郎氏に、その熱い思いを寄稿していただいた。

## 発足記念シンポジウムに参加して

グラフィックデザイナー 田中雄一郎

「島会」の発足は、京橋界隈の町づくりの話から始まった。1989年にスタートした京橋朝市がこの20年で定着し、新たな町づくりを考える時期に来ていることも一つのきっかけとなった。会長には、近代史の権威で就美大学の元学長柴田一先生が就任された。

発足記念のシンポジウムでは、柴田会長から「京橋の話」として、宇喜多秀家によって作られる京橋の成り立ち、その変遷など江戸時代の裏話も含め興味深い話を伺った。また香川県の直島など瀬戸内海の島々に現代アートを投入することで新しい地域づくりを展開されている福武総一郎氏(直島福武美術館財団理事長)から「世界一美しい瀬戸内海をもっと見直し、地域に住む人々、とりわけお年寄りの笑顔が溢れる地域づくりが必要」と示唆に富んだ基調講演を聴くことができた。

続いて岡山で地域づくりに取り組んでいる写真家の青地大輔氏、地域デザイナーの井筒木綿子氏、そして私という若者層と、ベテランの福武理事長といった組み合わせのパネルディスカッションが行われた。パネリストのそれぞれの経験を通じたアイデアは、これからの島会を方向付ける貴重なものと感じた。



## 視線を瀬戸内海へ

## 瀬戸内の島々交流協議会(通称・島会)発足

## 私の地域づくりの原点

私は、地域づくりは地域デザインと考えている。グラフィックデザイナーとしての私の日常の仕事は、企業や商品の持つ良さを見つけて、その社会的な理念と優秀さを、視覚的に表現して伝えていくことにある。当然そこに表現された事象が、相手に良質に伝わらなければ無価値となる。地域づくりも同様で、どんな理念の下で地域を構成し、その地域に住む、或いは利用する人々が、どんなメリットを享受することができるのか。そうした視覚的デザインが描けない地域づくりは前進しないと考える。

地域づくりは一人ではできない。世代、職種を越えた連携が求められる。多くの人々が、多くの議論を重ねて未来に繋がるものを生み出していく。それが地域づくりの原点で、そんな地域づくりに参加したいと思う。

## 「島会」に多くの市民参加を

瀬戸内海は美しいだけではない。新鮮な魚介類、深い歴史に培われてきた文化、新しい芸術のうねり。瀬戸内海には地中海を上回る世界的な価値が、しかも眼前にあることをもっと意識したい。

「島会」は発足したばかりだが、記念シンポジウムに参加した多くの人たちの賛同を得て、会員は既に100人を越えた。

京橋を拠点に、もっと瀬戸内海に出よう！

過疎といわれる島々をもっと元気にしよう！

旭川河畔のウォーターフロントにもっと目を向け、

岡山の嘗ての賑わいを取り戻そう！

「島会」がめざす町づくりの運動を大きく盛り上げるために、より多くの市民の参加を求めている。



田中雄一郎 (クオデザインスタイル代表)

1975年岡山市生まれ。名古屋の都市計画コンサルタントを経て、2004年帰岡。独学でデザインを学び、現会社を設立。主なデザインに福武教育文化振興財団C1、岡山市出石町のビジュアルデザインなど。島会のポスターも氏のデザイン。第41回サインデザインアワード入選、A P Aアワード2009入選など受賞多数。

## 瀬戸内海「船の通る風景」(緑川洋一)



## 父と瀬戸内海

この作品は塩飽諸島の与島から撮影したもので、アメリカのグラフィック誌「ライフ」の表紙を飾った思い出の一枚です。父はフィルタラーや多重露出、調子の硬いフィルムを使ってトーンを省略をするなどの表現技術を編み出していますが、その原点は瀬戸内の人々の暮らしや、風景を記録する中で芽生えたようです。写真集「瀬戸内海」(1962年)の中で

「最初は、自然の風景をそのまま写していたが、それは瀬戸内海に対する私のイメージを満足させてくれるものではなかった」と述べ、膨らんだイメージを表現するためのテクニックが生まれたことを裏付けています。

父は、休診日の土曜、日曜日になると撮影に出かけ、私たち3人の子どもたちは取り残され、淋しい日々を送っていました。それでも夏休みだけは瀬戸内のどこかで数日間過ごし、海水浴や釣りを楽しみましたが、時間が来ると父は海岸に出かけ、日の出や入陽に向かって何枚ものシャッターを切っていました。そんな父の姿が今も思い浮かびます。この作品は、プラスXで撮影したものをリスフィルムへ焼きつけ、それに輝く海を写しこんだもので、赤・オレンジ・黄・ブルーのフィルターが使用されています。この作品以後、多重露出によるモニタージュアや赤外線などを使った作品が加速度を増えています。(長女・西 瑞子)

## Editor's comments

\* 2009年、いよいよ瀬戸内国際芸術祭へ向けた新瀬戸内海の時代が幕を開けました。「季刊・不易」でも、ことしは瀬戸内海をこよなく愛した緑川洋一さんの代表作を表紙に掲げ、長女の瑞子さんが父を語る企画をスタートさせました。2010年7月19日の「海の日」に開幕する瀬戸内国際芸術祭へ向けては、様々な企画が組まれており、輝きを増す瀬戸内海に世界の注目が集まりそうです。

\* 遅れている日本の職業教育に風穴を開けようと、財団では2008年から英語力とスキルを身につけるための「オーストラリアのTAFE研究」を始めています。昨年は高校教諭を中心とする20名の視察団をクイーンズランド州にあるTAFE(職業教育カレッジ)3校に派遣、先生方の研究発表も行われました。世界がグローバル化している中で、教育もグローバル化しなければ。日本と同じ非英語圏の中国、韓国のグローバル教育はかなりのスピードで進んでいます。このため財団ではことしも研究者を募り、オーストラリアへの派遣を計画しています。

\* 丑年は、陰陽五行説では、陽の子と寅に挟まれた陰の土気。種子の中に生じた芽が一気に伸びる日を待っている状態にある年だそうです。しかし私たちは、来年の瀬戸内国際芸術祭に向けて“陰の気”を蹴飛ばし、全速力で走る年になりそうです。(S)

季刊 不易

F U E K I vol.33 2009.1.25

財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市南方3-7-17  
TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190  
http://www.fukutake.or.jp/

制作 株式会社 吉備人  
デザイン 田中雄一郎(QUA DESIGN style)

財団では、県下の教育関係者の視野を国際的に広げるため、平成2年度から18回にわたり海外教育事情調査を実施したが、昨年度からは、世界で最も進んでいると言われるオーストラリアの職業教育システムを調査している。昨年は、教育制度全般も調査したが、今年は、クィーンズランド州のTAFEを中心に、また20人の団員も高校の先生を主体にして、的を絞った調査を行った。

**TAFE(Technical and Further Education)**とは、オーストラリアにある公立の総合職業専門学校の総称で州が運営する。全土で230を超えるキャンパスを有し、各国留学生は1万8000人を超える。留学生に対する英語教育水準や、学生が取得できる資格は国によって標準化されている。

また、一定の資格を取得すれば、提携大学への編入の道も用意されている。

### 1 ゴールドコーストInstitute of TAFE

さすがに世界的な観光地、保養地にあるTAFEらしく、建築、自動車、サービス、接客などに重点が置かれているようだ。一口にTAFEと言っても、それぞれプログラムは異なり、地域のニーズに合ったものとなっている。

### 2 VET(Vocational Education and Training)

TAFEを束ねる州政府機関で、職業教育制度についての説明を受ける。丁寧な説明に、教育システムに対する自信と誇りを感じる。その後、Trade Queensland主催の歓迎レセプションが開催され、州大臣閣下をはじめ経済界の要人が多数参加された。



州大臣を囲んで  
福武理事長(左)と目瀬団長

### 3 サウスバンクInstitute of Technology

ブリスベン市内の文教地区に広がる学校。

TAFEより、運営面での自由度を増した学校で約400の授業コースを有する。日本人留学生から慕われている国際部のSachiko氏が印象的。学長主催のディナーは、学生が調理、サー



学長主催のディナー

ビスするレストラン。ブリスベンは気候、風土、人柄など岡山と相性が良いように感じる。

## 海外教育事情調査団報告

# オーストラリアの職業教育 PART 2



ファッションパレード

### 4 メトロポリタンサウスInstitute of TAFE

ファッション関係で有名なTAFE。視察日は、学生によるファッションパレードの開催日。TVでしか見えないような本格的なショーに驚く。

### 5 GCA(Global Career Academy)とTAFE NSW-NSI

クロウズネストカレッジ(シドニー)

福武理事長が設立したGCAには、現在10人の第1期生が、GCAと提携しているクロウズネストカレッジで英語のトレーニングに励んでいる。留学した動機や年齢は様々だが、GCAのサポートを受けていきいきと学び生活している様子がうかがえる。



GCA第1期生

オーストラリアの職業教育制度は、社会のニーズに応じた学科の豊富さと質の高さ、外国人留学生への英語教育、大学との提携による編入制度、社会に出てからの再教育などが、国が定める基準と州や学校の努力によってシステム化されている。

そこには、多様な価値観と専門的な技術者を大切に、より高いスキルを身につける努力を支援しようとする社会の方が現れているように感じる。

現在、グローバル化が急速に進展し、ある国の生産や金融が、またたく間に世界中に影響を及ぼすような状況をしばしば見受けられるようになった。このような中で生きていかなければならない子どもたちに、日本の教育は対応できるものになっているだろうか。オーストラリアの職業教育に学ぶものは多い。

今回、クィーンズランド州政府の全面的なご支援により、州政府と各学校のあたたかいおもてなしや十分なご説明をいただいた。心から感謝申し上げます。(財団・中野)  
(なお、調査の詳細については3月頃報告書を発刊する予定です。)